

平成21年度第1回 山口県教育振興推進会議 (概要)

- 1 日時 平成21年8月11日(火) 10:00~12:00
- 2 場所 教育委員会室
- 3 概要

(1) 山口県教育ビジョンの新実行計画に係る概要説明

□別添協議資料「山口県教育ビジョン新実行計画方向性について」(P1~4)に基づき事務局が説明

(2) 意見交換

ア 基本フレーム案について

- ・ 施策の推進に当たっての基本方針として示す3つの軸の中に「コミュニケーション能力を育む教育」があるが、小学校では、朝の会でスピーチを行う等の取組が進んでおり、自己表現する力や仲間意識が芽生えるなど、子どもたちに「元気」や「基礎・基本」の中に位置づけられる学ぶ意欲が生まれている。身近な出来事をテーマとすることが多く、自然や世の中の動きなど、地域との「つながり」も生まれている。「コミュニケーションを育む教育」は、「元気、基礎・基本、つながり」という3つのキーワードを具現化する取組である。こうした子どもたちの変化に教師自身が驚き、自主的に授業公開が行われるなど学校の活性化にもつながっている。今後は、実践する場を具体的に示したり、実践事例をモデルとして紹介することについても検討して欲しい。
- ・ イメージ図にインパクトが必要である。実際には重なり合った形で実施されていくことになることから、キーワード等を列挙するのではなく、構造的に示す必要がある。例えば、学力、体力、豊かな心などが「基礎・基本」、これらを活用し、課題に立ち向かっていく時に必要になるのが「元気」、その「元気」をエネルギーにして実際に行うときに必要になってくるのが地域や様々な縦横の「つながり」である。さらには、そうした行動を律していく時に必要になるのか「基礎・基本」。「基礎・基本」→「元気」→「つながり」→「基礎基本」という構造が見えてくるのではないか。
- ・ 3つのキーワードと基本方針の3軸も関わりがある。「基礎・基本」を「元気」へつなげていくためには、夢を実現しようとする意欲や態度が必要であり、それが「キャリア教育」である。「元気」を「つながり」につなげていくためには「コミュニケーション」が必要である。3つの軸は、3つのキーワードを動かしていくために必要なものであり、循環的な関係で捉えることが必要である。
- ・ 学校教育の場を考えるとコミュニケーションという”意志を伝える”だけでとらえてよいのか。少し表面的なつきあいという印象がある。適応や対人関係といった気持ちが表れるような言葉で表現できないか。言語だけでなく、心から伝わる非言語の視点も加えた幅広く深い捉えが必要である。
- ・ 教育の出発点である幼稚園では「私が大事、友達が大事、みんな好き」という観点から始めており、生きる力をこうした観点から捉えている。また、「人と関わる」ではなく、「人と関わる力の育ち」が重要であり、言葉にならない心を探りながら教育実践をしている。
- ・ 知育、徳育、体育に食育を加え、親自身が育てていく「親育て」が必要になってきている。”親育て”には幼稚園・小学校の連携が必要である。
- ・ 今後は、「キャリア教育」が重要であり、特に、小中高を通じた教育がベースである。コミュニケーションという言葉も同じであるが、キャリア教育、キャリア発達という言葉は、広く捉えるのか、わかりにくい面もあることから別の場面でしっかりとした説明が必要である。
- ・ キャリア教育とは、画一的ではなく、個性を生かす教育である。そして個性を受け入れる仕組みがあることが重要であり、指導者の資質や少数の子どもたちに対する目配りが必要である。
- ・ 家庭や学校で育った子どもたちを最終的に引き受ける立場である企業の経営者は皆、その人生を成功させてやりたいと思っている。そのためには、”一人ひとりの夢”から考えを変えさせていかなければならない。夢の多くは”自分の欲”である。これを変え、”人のために汗水流せる”ひとづくりをしていかなければならない。時間がかかるが、これができた時、お客様に対する徹底したサービスをやり続けられる人間ができ、それが光る。サービスを越えた感動を与えるためには、”欲”を越え、”人のために”という考え方がないとできない。
- ・ 一部で優れた、勉強ができる人間も育てなければ、世界から遅れていく。しかし、頑張っても成績が上がらない人間を、どのようにして努力する人間に育てていくか考えていく必要がある。
- ・ 保護者が学校に願っていることは一人ひとりを大切にしたいということである。
- ・ コミュニケーション能力が身につかないと達成感も味わえず、達成感がないと前向きになれない。

イ 重点取組事項案について

論点1 教育内容の充実(知徳体の育成)と教育環境づくりへの取組について

□別添協議資料「山口県教育ビジョン新実行計画方向性について」(P5~8)に基づき事務局が説明

- ・ 大企業への就職志向が強いが、全国の99.7%が中小企業であり、優秀な生徒を、中堅企業の良い社長がいる会社に就職させて欲しい。仕事が楽しくて仕方がないという素晴らしい人生を送ることができる。社長と一緒に夢を語り、実践していく人材、企業もそうした人材を求めている。大企業に就職することが必ずしも成功ではなく、他のところに人生の成功はある。そうした視点で子どもたちに夢を持たせて欲しい。就職指導に際しては、そのような視点も持って欲しい。
- ・ 中学校や高校で、優れた社会人と接する機会を設ける必要がある。また、教員自身が聞いて、体験して子どもたちに伝え、教員自身が高まっていくような教員の資質向上の取組が必要である。
- ・ 教員が短期の研修で企業に来ることがあるが、児童生徒を引っ張っていきけるか、視野が狭いのではないかと感じることもある。人間力の面を高めていくことが必要である。優秀な人材を採用しているのだから、育てて行くことが必要。
- ・ 管理職には、方針を理解して、その方針を伝え、一定方向に引っ張っていくリーダーシップが必要であるが、そのような人材はなかなかいない。教員も採用後、35人を受け持ち、一定の方向に

引っ張っていかなければならない。教員採用の方法も検討する必要がある。

- ・ 生徒指導・相談体制の中で、スクールカウンセラーの配置については100%となっているが、実態を見てみると、配置されている校数は同じでも、学校にいる時間数は減っており、充実したと言えるのか。予算が厳しい状況もわかるが、それ相応の対応も必要である。
- ・ 地域との連携、幼小連携、小中連携などで子どもたちを見てきている様々な人の話を教員が聞く機会があると良い。
- ・ 子どもはみんなお手伝い好きであり、好奇心が旺盛で、素晴らしいものをもっているが、大人になる中で、それらが失われていく。一人ひとりを大事にし、継続的に取り組むことが重要である。
- ・ 今、目の前にあることはあなたの力ではない、役に立って生きることがあなたの力であるということ子どもたちにしっかり教えたい。
- ・ 「教員が児童生徒一人ひとりと向き合う環境づくり」の中に、「体育の授業、運動部における」とあるが、体育の授業や運動部に限る必要はなく、学校教育活動全体に人材を活用すべきである。
- ・ 子どもが見る大人が先生だけではいけない。多くの教員OBが学校支援ボランティアとして学校に協力しているが、学校がOBに手助けして欲しいのは、草取りであったり、保護者の対応であったりというのが多い。学校教育そのものへのお手伝いという声がなかなかかからない。地域の大人が学校に協力しやすい体制づくりが必要である。
- ・ 基本的方向Ⅰ、Ⅱの間が極めて重要である。基本的方向の5項目もかなり関連している。独立した形で推進しても効果はあがらない。例えば食育の観点から教科指導をする。健康教育の観点から教科指導を行うようなⅠとⅡを関連させた指導方法が必要である。
- ・ 各プロジェクトの構造は、基本的方向のⅠ（自立と確かな学力）を中心にして、その周りに、Ⅱ（健やかな体と豊かな心）があり、その周りにⅢ（教育環境）があるように同心円的な構造となっている。この構造を踏まえながら、彗星的な軌道を描くのが学校現場の取組と言う構造である。
- ・ 教員の資質能力の向上、校種間連携に関して、小中の教員と高校の教員では、指導力や授業づくりの面で力の差を感じる。小中の先生は、研修する機会があるが、高校はそういった機会がないのか。そういった意味でも中高連携は必要であるが、指導方法の改善等と言う面でのハードルは高い。
- ・ 学力向上合宿を見てきた。その取組は、学力の向上、元気創造、豊かな心等、実行計画に示す内容を踏まえる内容であった。こうした実践事例をしっかり発信していくことが必要である。
- ・ 健康教育についても、地球環境の規模から、人間の健康や環境を考えると、マクロ的な視野から捉える視点が必要ではないか。

論点2 家庭、地域の教育力の向上等に向けた取組について

- 別添協議資料「山口県教育ビジョン新実行計画方向性について」(P8、9)に基づき事務局が説明
- ・ 本県は家庭教育番組等に力を入れており、メディアをうまく活用する取組を進めている。メディアを使い、繰り返すことにより浸透、定着していく、意識も変わっていくと感じている。
- ・ 家庭教育については、理解を深め、現実を知って、支えていくことが重要である。
- ・ 子育て支援の一環として、預かり保育や学童保育に取り組んでいるが、子どもを預けて親が海水浴に行くなど、子育て支援といいながら生活支援をしているような現実もある。親の意識を育てていかなければならない。
- ・ 子どもの一人ひとりの夢とは、学校の中では、子どもが知りたい、できるようになりたいという、教科の中での子どもの思いである。受け身の学習ではなく、主体性を伴わないと夢は実現できない。そのためには教育内容だけでなく、そうした指導観をもった教師の資質の向上が求められている。
- ・ 地域の中における子どもの夢は、文化や生き方も含めた大人が持っている世界に子どもたちが直接接触れる中で育まれる。子どもが体験的に掴んでいくものであり、体験的活動が重要である。
- ・ 地域と連携した活動の前に、大人の活動の側に子どもを連れて行くなど、大人と子どもを近い距離におくことから始めなければならない。大人も子どもを見えなくなっており、子どもも大人から遠ざかっている。
- ・ 基本的方向のⅤの県民文化育成プロジェクトの中に、優れた文化に触れるというのがあるが、芸術に傾斜している。芸術に関する環境づくりも重要であるが、理科教育の部分を見ると、科学技術文化という観点もある。文化を広く理解し、子どもたちがいろいろな文化に触れ、基本的方向のⅠの学力形成に寄与していく、そういう関連を作り出していくことも必要である。
- ・ 文化財保護についても、文化財に常に触れることは重要であるが、いまだに展示型博物館が多く、子どもたちはどこが優れているのかわからない。展示物をどのようにみればよいかわからない状況がある。近年では参加型、表現型の博物館が増えている。子どもに驚きを与え、それをもとにして、探究が始まる。文化に触れるという取組も学力形成に関連させていくことが必要である。

(3) 閉会

- ・ 施策推進にあたって3つの軸をあげているが、教育は、子どもたちに目標を持たせ、その人格を形成をしていく営みである。目標を持ち、社会に出てその役割を果たしていく意欲や姿勢を育むということが、”キャリア教育”の原点である。こうした自己の実現に向かう子どもたちの成長が中心にあるが、子どもたちは社会や他者とのかかわりの中で生活しているのであり、そのかかわりに必要になってくるのが”コミュニケーション”である。また、我々は、過去から現在、未来という時間のつながりの中で生きているのであり、そういう構造の中で、”伝統文化”を考えている。
- ・ キャリア教育については、「自分が好きなことは何か」、「自分ができることは何か」、そして、「今、社会が求めていることが何か」という視点から考えなければならない。我々も職業選択に際しては、この3つの視点をバランスをとりながら、小中高の各段階で考え、力が足りなければ努力をしてきた。これらを小学校の段階から、中学校、高校の段階へと段階的につなげ、最終的には社会が求めていることにつなげていく、そうした組み立ても考えている。